

ご支援いただいたみなさまへ

お父さんたちのネットワーク

石垣政裕

支援のご報告No.18

－三陸の小学校へ－

風の冷たい三陸へ

平日の三陸道は石巻方面に向かう車で必ず渋滞します。それでも通勤時間を少しずれていたため到着が大きく遅れることはありませんでした。12月13日。三陸道を河北インターで降り、45号線、一関街道を上ってすぐ、飯野川という街に入りました。

明治時代に新田開発と船運の整備のため、それまで石巻まで流れていた北上川を追波湾へと流す工事が行われました。飯野川は二手に分かれた新旧北上川が接近する場所に当たります。津波は追波湾から新北上川に沿って登り、河岸にあった石巻市立大川小学校を飲み込んでいきました。

飯野川第一小学校に避難している大川小学校も、中に入ると校舎の中は以前に来たときよりずっと片付いていました。それだけに、先生方の工夫と苦勞の跡が見て取れます。それでも児童・教員など多くの犠牲者がでたこの小学校の様子をお聞きしても、まだまだ解決されない問題が山積みされています。

それぞれが、まだ見つかっていない犠牲者を見つけないという気持ち。多くの方が、助けられなかった自分自身を責める。癒されない心と疲労を詰め込んでいく身体が持ちこたえていけるのだろうか、「健康でいて欲しい」、それだけしか祈ることができない私たちの立場が恨めしいのです。

校長先生にドイツの和太鼓のグループと空手の道場が立ち上げた[Handschlag](#)というグループが集めておくってくださった支援をホームページと私に宛てられた手紙を添えて、お渡しいたしました。子どもたちの野外活動や冬を越していくための準備、学校を維持していくさまざまなところで利用していただけます。感謝しておられました。



大川小学校柏葉校長先生と



枠だけが残った大川小学校跡

チューリップは春を待っている

現在の大川小学校がある飯野川第一小学校を後にし、新北上川沿いを河口に向かって下っていきました。生々しい津波の痕、小学校の位置する集落はほとんど無くなっている。北上川河畔に吹く冷たい風に身体が冷えているのではなかったのです。

「まさかここまで」と思うほど津波がここまで来るなどと誰が予想できたでしょうか。

おそらく体育館だったのだろう。階段だけが残っている場所の近くにコンクリートの壁があり、東北の詩人宮沢賢治と彼の童話「銀河鉄道の夜」の絵が描かれてあります。朽ちたコンクリートには「世界が全体に幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない・・・宮沢賢治」と書かれています。

子どもたちが避難しようと目指した堤防の上にある道路の三角地帯には親御さんたちがチューリップを植えたのだそうです。春になって、この球根が花となり、人びとの心を少しでも癒してくれるだろう。わたしたちもそう願っています。



コンクリート壁に描かれていた絵

なにこともなかったように

志津川湾から250メートルほどのところにあった南三陸町立戸倉小学校は、いま車で30分ほど内陸部に入った既に廃校となった旧善王寺小学校で開校されています。子どもたちも毎日バスで登下校しています。最初のうちは慣れなくて学校に来るだけで大変だったそうですが、いまはずいぶん慣れたと校長先生は話しておられました。

一旦内陸に入れば、何事もなかったように車が猛烈に行き交い、人々の毎日の生活があり、穏やかな晩秋があります。

校長の麻川（あそかわ）先生は、私も以前から知っているので懐かしくお話ししました。ミミズに大変詳しい先生で、ミミズの大変珍しい話をいつも楽しく話してくださいます。この日も「ミミズにも足があるんですよ」などと話を切り出してくれました。児童と一緒に飼っていた2000匹のミミズも津波で流されてしまいました。

津波発生後、全校で山側にある高台に非難したそうですが、高台の高さは10なんメートルもあります。その高台の高さにも津波が来たので、更に上に移動し、たき火を焚いて救助を待ったそうです。亡くなった方に思いをよせながらも、犠牲者



戸倉小学校校長先生、教頭先生と

がとても少なただけがせめてもの救いだそうです。心が痛みます。

戸倉小学校は来年3月、現在の避難先の旧善王寺小学校から別の学校へとまた引っ越しをしなければいけません。先生も子どもたちも落ち着かない生活が続きます。

海も泣いている

4時を過ぎれば周りも暗くなる。私たちは旧善王寺小学校から、山間を志津川湾に抜けるJR気仙沼線沿いに、再び車を走らせました。これまで幾たびも津波に見舞われ続けた三陸沿岸の町は津波に対する警戒ができていました。しかし、今回の一つ前の地震でも大丈夫だったという安心感が落とし穴だったとお聞きしました。

海に近づくとつれ、山裾の杉が等高線を示すように一様に枯れています。まるでジオラマを横から見ているように、津波がそこまで到達したことを山の色で知ることができます。線路は既になく、陸前戸倉駅も跡形もなく消えています。

がれきのある程度片づいた町は、耐震工事をした校舎だけがポツンと海に面しています。校舎の上まで水が来たというのですから、少し離れた山に登ったのは、ほんとうに適切な判断だったということが良く分かります。3月に竣工したばかりという体育館は骨組みが骸骨のように折れ曲がり、上から絡みつくように垂れ下がった袖幕だけが、ここがステージだったことを示唆しています。静かな海が、ある日突然に理不尽な災害をもたらす。そして海すら自分の、自分たちの本性に気づく。その自然の枠組みの中でまた私たちに人間も、震災時の自分をふり返る日々が続いています。

私はこれまで被災地にカメラを向けることを躊躇してきました。犠牲になった方々のことを考えるととてもシャッターが押せませんでした。「伝えること」そう自分に言い聞かせて小さなカメラに記憶を収めました。



枠だけになってしまった戸倉小学校